



## ◆岡田隆介◆

今年2月に、第20回「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助研修会」が琵琶湖のほとりで開催されました。その第一日目の企画に、本マガジン編集長の団さんとのフリートークがありました。

なにせフリーですから、話が絡んでヒートアップすることはありません。そのせいか、徐々に会場の空気が緩んできます。わたしは、なんとか参加者のゴールポストの枠内におさめようと汗をかきました。隣の団さんとは、そんなことに関係なく、次々とゴールポストの外をめがけてボールを蹴ります。

ところが、それがけっこうお客のネットを揺するのです。ネットは枠の外に！フリートークの会場では面接室と同じことが起きていたのです。とはいえ、二人が枠を外してばかりではネットは反応しなくなります。なかなか奥の深い2時間でした。

PS ちなみに第21回大会は、23年2月4～5日に広島で開かれます。ふるってご参加ください。

## ◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職。大学院のときに僧侶となった。特に得意なものがない坊さんになりたいと思った。中途半端でもいいから何でもしようと思った。7年前に住職となった。住職は何でも要求される。経を読誦して儀式をする。法話をする。市井の仏教研修会をする。寺の修繕をする。草刈り機も、

チェーンソーも、ユンボも使えるようになった。寺の裏に作ったクライミングウォールに登る時間が無いのが問題。

## ◆河岸由里子◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

仕事に疲れると、時々何かに熱中する癖がある。大抵は何かを作るかパズル。プラモデルが昔から好きなので、気が向くと作る。以前テレビでハーレーダビッドソンの4分の1スケールモデルの広告をしていて、つい買ってしまった。ご存知のディアゴスティニ。バラバラに部品が届くので全部買い終わるまでに何と1年半もかかった。しかし造るのにかかった時間は夜少しずつ作って1ヶ月弱。完成した瞬間は嬉しいのだが、出来上がってみると、置き場所に困った。そこで、これからは小さいものと思い、Nanoblockに没頭。先日はインコ。そしてモン・サン・ミッシェル。時間も余りかからないし、ブロックだからバラせば場所をとらない。老眼にはきついが、何も考えずに何かに没頭していると、楽しいし、良い気分転換になる。しかも指先を使うのでボケ防止にもなるかと。それにしても、ディアゴスティニの商法は上手く出来ているなあと関心してしまう。今テレビではロボットを作るシリーズを広告している。「面白そう、作りたい！」という気持ちが又湧いてきて、抑えるのに一苦労。初回790円にはまってしまう人がきっと全国に何人も居るのだろう。

## ◆村本邦子◆

今年になって、何を考えたのか、朝のジョギングを始めました。夜が明け、日が昇り、新しい朝が始まるという壮大な自然のドラマの中で走りながら、同じように早起きして、走ったり、歩いたり、太極拳をしたりしている人々と、言葉を交わすこともないままに、つながりの感覚を持つことができます。だいたい1時間10キロですが、家に戻ると、ちょうど仕掛けていったパンが焼き上がり、いいにおいに包まれます。何ともゴージャスな朝ではありませんか。

その一方で、私って、突然の思いつきで新しいことを始めては、やりだすとおもしろく

なって意外に長く続けてしまうので、気づいてみれば、あまりにたくさんものを身につけてきてしまいました。人生後半は、抱え込んできたものを少しずつ整理し、手放し、生まれてきたときのように身ひとつになっていかなければならないとも思い始めています。まだしばらく間があるはずですが、これからの課題だと思っています。

## ◆北村真也◆

私塾「アウラ学びの森」代表。立命館大学大学院応用人間科学研究科所属。(アウラ学びの森 <http://tiseikan.com>)

2000年、京都府亀岡市に自らの研究フィールドとして「グローバル教育研究所」を設立、同年、学びの共同体としての私塾「アウラ学びの森」、2005年には、京都府教育委員会認定フリースクール・サポート校として「知識館」を開校し、自らの理論研究と実践を通して〈ポストモダンな学び〉の実現をめざす。また、2005年より京都府教育委員会、2009年より京都府庁青少年課の研究委託事業を受託し、教育に関わるプロジェクトを行政と共に企画実行している。

1月末ようやく修士論文を書き上げ、2月に無事口頭試問を終えることができました。あとは3月の卒業式を迎えるだけです。振り返ればアツという間の学生生活でした。25年ぶりに訪れた大学は、私が通っていた頃とは、随分趣を変えていました。まず学生の数が多かったこと、キャンパスを歩いていると新京極(京都の繁華街)にいるような感じになる時がありました。そしてそれに連動するかのよう、様々なシステムが整備され、私たち学生がそのシステムによって完全に管理されているような錯覚に陥りました。これらの感覚は私の学部時代にはなかったもので、私にとって新鮮でもあり、また戸惑いを感じさせるものでもありました。ただそんな日々の学生生活の中で、昔と変わらないものがありました。それが人との出会いです。先生方をはじめ、仲間たちとの出会い。これは時代が移り変わっても変わるものではありませんでした。人は、出会いの中に学び、出会いの中に自らを変容させていくのだと思います。私はこの2年間を振り返り、そんな

なく(出会い)を実感してきたのです。卒業を前に、少しセンチメンタルな気分でこの原稿を書きました。50歳を前に、青春の断片を味わっているのかもしれませんが。

## ◆早樫一男◆

3月末までは児童相談所長ですが、4月からの身分は大学教員です。児童相談所から始まり、知的障害者更生相談所、身体障害者更生相談所を経て、児童相談所長に戻りましたが、その後、一年間は児童自立支援施設(旧教護院)長でした。そして、再び、児童相談所に戻って、一区切りとなります。

「この間、長かったですか?それとも短かったですか?」と問われたことがありました。「そんな風に考えたことがなかったので、何とも言えない」という、そっけない返事をしました。

あえて言えば、家族を視野に入れたアプローチを身につけたことによって、どの対人援助現場に行っても、楽しく仕事ことができました。いろんな方々と巡り会えたことは私にとって、貴重な財産になっています。巡り会った方々に感謝です。

4月からの所属は、同志社大学心理学部です。これまで大切にしてきた「ジェノグラム」と「家族造形法」について、磨きをかけていると思っています。

## ◆木村晃子◆

創刊号の原稿を書いた後、一年近くの時間が流れています。一年前には、現在の状況など想像してはいませんでした。「最低一年、できれば、ずっと・・・」というような説明での連載執筆のお誘いだったことを覚えています。

締め切りの催促もゆるく、それがまた自分の中でプレッシャーになり、どうしても締め切りに間に合わせたいと思い書き続けています。一回くらい連載欠場でもいいや、などという気持ちにはならないのです。ずっと、執筆者としてエントリーし続けたいという思いが強くなっています。

そして、ケアマネとして出会った家族の物語の他にも、書きたいものが頭の中で列をなして順番待ちをしています。

徒然なるままに、書き続けられるほど自己管理ができていない自分には、このマガジンの定期的な発行はとてありがたい仕組みです。しかも、テーマを持って執筆している連載とは別に、新たな枠(この枠です)も与えられました。活用しない手はないなと思いました。今回は、決意表明です。次回からこの新しいスペースで短編小説?!を書いてみようと思います。お楽しみに!でも、決意が変わっているかもしれません。その時は、ご勘弁願います。

\*北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。小学校2年生の時に書いていた日記には、「将来の夢は小説家になること」と書いてありました。



## ◆中島弘美◆

『家族支援心理カウンセラー』です。もともとは、家族療法の専門相談機関にいましたが、1995年に独立開業し、大阪梅田で、CON(こん)カウンセリングオフィス中島をしています。

ご相談に来られる内容は、不登校など学校関係することが中心で、高校生や大学生とその家族が多く来所されています。

ここ数年は、相談内容にも幅が出てきました。不登校の他に、精神障害、知的障害の子どもさんを持つご家族の支援。高齢者を介護する家族の支援、うつ状態にある人とそのパートナーの夫婦家族面接など、病院の医師からカウンセリングを勧められてこられている方が多いです。

面接費用は一回約90分15000円、完全予約制です。

学校と連携しての支援、社会資源の紹介を含めての支援、医師の診察と並行してのカウンセリングなど、連携を重視するネットワー

クの中で家族支援をしています。

前回の対人援助学会に参加することで、このマガジンの他のページを書かれている著者の方々とお会いし、お話しする機会がありました。お隣さんの様子がわかって、とてもうれしかったです。ここからさらに活動が広がるように、マガジン宣伝にも力を入れたいと思っています!

## ◆水野スウ◆ 「紅茶の時間」家主

東京生まれ。石川県津幡町の住人。1983年から毎水曜日の午後、自宅をひらいて、誰でもどうぞ、のオープンハウス「紅茶の時間」をはじめ。96年からは、コミュニケーションを練習する場「ともの時間」の水先案内人も。著書に、「雪の手みやげ」「ありがとうのパッチワーク」「想いのコンクジュース」。紅茶3部作として「まわれ、かざぐるま」「出逢いのタペストリィ」「きもちは、言葉をさがしている」、共著に「ほめ言葉のシャワー」ほか。

「紅茶なきもち」blog

<http://kimochi-tea.cocolog-nifty.com/blog/>

出前紅茶こと、お話やワークショップの出前で、なじみの町や知らない町へよく出かけます。この一年は特に、「ほめ言葉のシャワー」がご縁の出前が多かったです。娘と制作した同名の冊子が思いがけなく全国に広がり、読んだ方々からたっくさんの感想をいただき、感じることに気づかされたことが、これまたたっくさんありました。

出前先では、「ほめてのばす本ください」という注文に違和感を持ったことから始まり、日本語の「ほめる」にまわりつく様ざまな勘違いや、ほめ言葉の呪縛について、また、人よりすごい・できる、目に見える結果、といったdoばかりが重視されすぎていて、その人がいてくれること=beの意味が、ないがしろにされている気がする、などについて語っています。

先の冊子だけでは伝えきれなかったそんな想いを、あらたに一冊にまとめよう、と昨秋から、娘と遠距離協働作業中。そのブックレット「贈りものの言葉」は、夏までにできあがる予定です。

## ◆尾上明代◆

国内で最初の米国ドラマセラピー学会公認ドラマセラピストとして、ドラマセラピーのセッションやトレーニングを種々の場で行い、その普及や教育にイそむ。

ドラマセラピー教育・研究センター代表。  
2007年度より立命館大学大学院応用人間科学研究科教授も務める。

治療セッションとしては、現在、アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症者の回復にむけて力を注いでいる。

☆この2月-3月、力を入れている仕事は、「子どもの心を取り戻す！」というテーマで創った一般の方々向け連続セッションです。

子ども時代に、子どもであることを味わい、子どもの心を体感して過ごす。これができれば理想的ですが、それが叶わない場合も多々あります。

子ども時代の不安全感は、状況や内容が違って、多くの人がかかっていると思いますが、「大人の自分」が「子どもだった自分」をまず見つけて、そしていたわり・慰め・癒すということは、すごく大切なことです。

また、子どもの頃の遊びと結びついた自由さ、熱心さ、開放性、想像力、創造力などを、そのまま持ち続けていれば、どれほど人生に豊かさ、深さ、恩恵が得られるか計りしれません。ここに子どもがするような「遊び」を、大人が行うことの意義や重要性が出てくるのです。

子どもになるセッションと聞いて、「子ども役」を演じなければならぬのかな、と初めに思った参加者もいたようですが、子どもになる演技というより、本当に子どもでいることができるワークを創りました。これは、少しずつ多くのワークを積み重ね、プロセスを発展させることで可能になります。

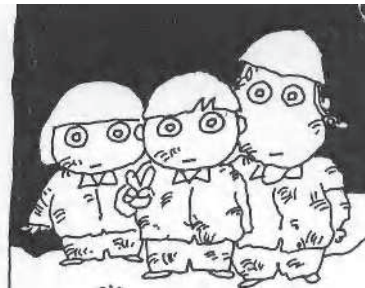
14人の「元子ども」の皆さんと、毎週楽しいセッションが進行中です！

## ◆藤 信子◆

立命館大学大学院応用人間科学研究科教授、専門は臨床心理学、コミュニティ心理学、集団精神療法。この4号が出た時は済んでいるけれど、原稿を書いている今は、3月12、

13日の「集団精神療学会第28回大会」の準備がいよいよ大詰めで大忙しです。参加される方々が、良い体験をされる大会にしたいと思っている。

臨床の最初の対象は、精神病院での統合失調症（当時は、精神分裂病と呼ばれていた）の人達だった。数年前、私の講義をたまたま聴講していたPSWから「藤さんは統合失調症が本当に好きなんだということがわかった」と言われた。聞き取ってしてくれたその人のことばになるほど、と思った。この頃は、少しフィールドが広がり過ぎの感がある、難病、高齢者、小児脳腫瘍の治療後何年もの経過の人たち、いつの間にかこうなっていた。この広がったところのことも、人に理解してもらえるように話せるようになりたい、と思うけれど、そのためには長生きしなければならぬかしら、と考えているこの頃である。



## ◆浦田雅夫◆

これまで、高校社会科講師（常勤・非常勤）、スクールカウンセラー、心理療育施設セラピスト、児童相談所嘱託（虐待対応協力員）、児童養護施設指導員など子どもにかかわる場で勤めてきました。2007年からは、保育士養成にかかわり、奈良佐保短期大学幼児教育科を経て、現在は京都造形芸術大学芸術学部子ども芸術学科専任講師として、アートを感じながら児童福祉や保育実習指導などを担当しています。また、現在は他にスクールソーシャルワーカーとして中学校現場へ入り、子ども家庭への福祉的な支援を行なっています。

高校教員時代に、「底辺校」といわれる学校の子どもたちと出会ったことが、今の私の原動力のベースにあります。そして、一番、勉強をさせてもらったのが、児童相談所です。個性豊かな大先輩から受けた教えが今もここに残っています。児童養護施設では、あ

らためて「家族」について日々考えさせられました。人との出会いによって人はものの見方、考え方、生き方が大きく変わるものだと思います。不運の連続のなかにいる子どもたちに、よき出会いがあることを願っています。

現在、京都弁護士会子どもの権利委員会の安保千秋弁護士、吉田雄大弁護士を中心に、京都に関西初の子どもシェルターを作る活動が始まっています。私も微力ながらかかわっています。みなさまも、ぜひ、協力をお願いいたします。

<http://blog.livedoor.jp/childshelter/>

## ◆西川友理◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士などの、福祉系対人援助職養成に携わっている者です。学生達と過ごす日々の中で見えてくるものを書いていきます。

さて、なんとか1巻分、計4回書かせていただきました。目次を見れば凄腕執筆陣、読ませていただいても面白い記事がたくさん。一読者としてはともかく、ライターとしては激しく場違いじゃないかと思いつつ、イヤイヤ身の丈よりも高い場に身を置いてこそ研鑽出来るのだ、周りが凄腕だから一人くらいこんな奴がいてもいいのだ、と呪文を唱え、締め切りが近づくと、毎度毎度頭を抱えウンウン唸りながらも、実は結構楽しんで書かせていただきました。

これを書いている時期、職場ではちょうど、卒業式の準備をしているところです。なんだかんた言いながら、みんなそれなりにキリッと引き締まった顔になって、無事巣立っていけそうです。えらいもんです。私もこの一年、成長できたかな？

この文章を提出したら、また新たな気持ちで、第2巻目に突入させていただきたいと思っています。どうぞよろしく願います。

## ◆川崎二三彦◆

（子どもの虹情報研修センター）

対人援助ということから考えると、「ちょっと違うかな」と思うかも知れませんが、ここしばらく＜幼児殺＞に関する先行研究を



ひたすら読み、それをまとめる作業に追われていました。初めて知ったこともたくさんあって、一つ紹介すると。

戦前には、死産（率）を「嫡出子」「私生子」などの身分別に集計していたんですね。でも、すごいですよ。たとえば昭和15年の「嫡出子」の死産率は約4%。ところが「私生子」は28%にのぼるんです。この関係、明治からほとんど変わらない。こういう歴史を背負っているからでしょうか、戦後もかなりの数の新生児に対する殺害が続いていました。

驚かされたのは、連続して殺害するような事例。9人産んで9人（9人ですよ！）殺害している人もいます。逆に、妊娠を隠して自宅で出産し、数時間は母乳を与えるなどの世話をしていたのに、家族が帰宅する時間が迫ってついに…、というような10代少女の哀しい事件も、文献検索中に見つけました。

こういう事件をどうしたら防ぐことができるのか、考えていかねばなりません。

なおこの報告は、厚生労働科学研究「我が国におけるチャイルド・デス・レビューに関する研究」の一部となる予定です。

さて、最近もう一つ書いたエッセイを紹介します。「ことはじめ、児童虐待防止事業」。百年前、日本で初めて児童虐待防止事業に取り組んだ原胤昭の活動を報告しました。当センター紀要に載せましたが、以下のホームページで閲覧できます。関心のある方、どうぞ。

[http://www.crc-japan.net/contents/guidance/pdf\\_data/kiyou\\_no8.pdf](http://www.crc-japan.net/contents/guidance/pdf_data/kiyou_no8.pdf)

## ◆ 団 士 郎 ◆

Facebookとツイッターを始めた。その前に、個人トレーナーについて週一回、加圧トレーニングを始めた。アメリカ育ちの日本人女性に週一回会って話をし始めた。（むこうは英語で私は日本語の対話）これと少し絡んでいるが、英語版の「木陰の物語」数編が大学の論文集に掲載になる。一昨年は、ソウルでのマンガ展出品のためハングル版の木陰の物語を一編作ったことがある。今年は、中国語版を作れたら面白いなと思っている。知人の絵本「赤いキリン」作りのプロデュースをし

たり、いろいろ動いている企画がある。

とにかく新しいことを始めようと思ったのが昨年の11月。1年間が同じスケジュールの繰り返しが多くなったなあと思ったからだ。順に開始して今のところどれも継続中。元々手を出していることが多いから、ますます忙しくなるが、楽しいと思えないことはやらない！と決めているので、面白いことだけで多忙な毎日である。3月末には、マガジン執筆者の一人、中村正さんと、イギリスに視察調査に出かける。ロンドンでは30年ぶりだ。

## ◆ 千葉晃央 ◆

（京都国際社会福祉センター、横大路学園）

「国際社会福祉情報 第34号」の編集をずっとしていました。今号の特集は「韓国の社会福祉士」です。アジアで日本だけが福祉先進国と思うことなかれ！福祉は、制度の充実や機器の充実具合だけではない！ITを駆使したシステムも是非学ばべきだわ。■団士郎先生、早稲一男先生が担当してくださっている京都国際社会福祉センターの家族療法課程プログラムがリニューアル。告知後すぐに受講申し込みがあり、私もたのしみにしています。■子どもの頃やりたくてもできなかった野球を、昨年38歳から始めました。こないだは元広島カーブの方にアドバイスを頂きました。ピッチャーに挑戦中。打球時、指が縫い目にかかる感覚をやっと実感！■ツイッターでは、マスコミが避けているニュースがたくさん入ってきて、「ツイッター革命」という側面の機能を体感中！

## ◆ 大野 睦 ◆

大阪生まれ。幼稚園時代、朝のご挨拶が出来ず自閉症児として扱われる。自然や動物が好きな子供は自然豊かなところで生きていきたいと大学卒業後に屋久島に移住。エコツアーガイドに就き、ネイティブビジョン設立。1998年独立、2001年法人化。2008年屋久島観光協会ガイド部長就任。満月の光と2000本のキャンドル、僅かな電力、そしてアーティストはじめ総スタッフ全員ボランティアで開催するコンサート「やくしま森祭り」発起人。

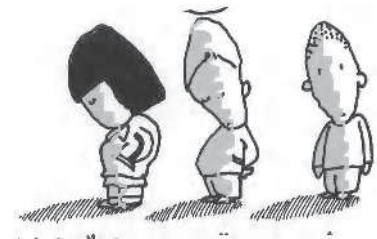
## ◆ 脇野千恵 ◆

小学校・中学校の講師としての教員生活は25年以上。その間、人権学習・性教育の研究に取り組み、実践を積んできた。

子どもに寄り添った教育を目指すために、京都社会福祉センター主催の援助講座にて色々なカウンセリング手法や家族療法についても学ぶ。10年前、地域で家族療法研究会を立ち上げ、教員・スクールカウンセラー・福祉施設従事者などを対象にした研修会を開催中。

近年、子どもだけでなく親への対応の難しさが問題になるが、家族理解という点に焦点をあて、家族療法がもつ知恵を学校で使えないかと実践中である。

思春期相談士の資格を持ち、思春期の子ども達への対応などに生かしている。現在、滋賀県大津市立中学校に勤務。教科は国語科。



## ◆ 松本健輔 ◆ 他己紹介 坊隆史より

松本くんは「Humming Bird」というカウンセリングオフィスを主宰しています。カップルカウンセリングという心理相談の盲点をついた業界進出で、さすがはシャチョーさんです。HPも素晴らしく、カウンセリングよりもそちらの業界で頑張ったら？とも思います。ぜひご覧ください

(<http://www.hummingbird-cr.com/>)。

私たちにとても一寸先は闇のリレー連載ですが、よろしく願いいたします。近況

最近ある小説家の本を読みました。主人公が不倫相手を本気で愛しながら死んでいくという内容の話でした。それを読んで「男ってあほなだなぁ」と思いながら不倫している男性の切ない思いに涙がでそうになりました。そしてそれを女友達に紹介して感想を聞いたら、「主人公が嫌い。あんな自分勝手な男なんて最低」と。

これを男女の違いというのかはわかりま

せんが、ほんとと人って受け取り方が違うなと実感した瞬間でした。そして、それは絶えず夫婦の中で繰り広げられる葛藤と重なるのだなあと。

## ◆中村 正◆

京都にある立命館大学というところで教員をしています。大学は法学部でした。大学院で社会学（社会病理学）を専攻し、現在は応用人間科学研究科という臨床心理や対人援助に関する専門職を養成する大学院で教えています。文字通り、「あいだ」にいます。さらに、逸脱行動に関わる臨床だけではなく、ボランティアやNPOなど社会のなかでの仕事もたくさんしています。この連載でも述べていますが、社会臨床という点では、1995年の阪神淡路大震災とオウム真理教事件のインパクトが強く、ある種の「災害ユートピア」のような社会の空気があり、社会連帯のエネルギーが湧き上がってきました。そこで組織したのが「きょうとNPOセンター」でした。その開設に携わり、その後、多様なNPOの創出に関与してきました。とくにNPO法人では本邦初のFMラジオ局を実現しました。現在、「NPO法人・京都三条ラジオカフェ」は三条寺町に放送局があります。3年程そこでパーソナリティをしていました。末尾にあるサイトからそのデジタル版が視聴できます。私の写真と声が登場します。途中、著作権の関係で数秒ほど音が途切れますがそのままにして聴いてください。もちろんこれは自己紹介なので顔と声の紹介に都合がよいと思った売名的動機ですが、ここでいいことはそうしたのではなく、この仕組みを活用して「声の対人援助学マガジン」として利用できないものかということです。まあとりあえず以下をご覧ください。

<http://happynpo.seesaa.net/article/149021216.html>

## ◆荒木晃子◆

生殖医療施設と精神科診療所の心理士を兼務。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。研究テーマは「不妊臨床と家族援助」。昨年より、島根県生殖医療施設（内田クリニック）と、県庁及び県内児童

相談所・乳児院と連携し、「不妊当事者カップルが家族をつくる」地域支援ネットワークの構築を目指す。同時に、彼らと、児童養護施設や乳児院等で暮らす子どもたちとの出会いを願い、冊子「ファミリー・aim・レポート」を作成。冊子は現在、島根県里親研修会、聖路加看護大学生殖看護認定看護師養成講座で採用された。島根家族援助研究会主宰。

多忙で単身故に在宅看護&介護がかなわず、認知症で脳性まひの母の入院を昨年末に決断。「自分の好きなことをやって生きてきなさい」と、いまは亡き父の口癖を、いつも隣で笑いながら聞いていた母だった。今年のお正月には、母の大好きな手作り「九州おせち」をつくり、自宅で一緒のお正月を過ごした。おそらく、母が自分の口から、自らお箸を使い食す最後のおせちとなるだろう。私の手作りおせちは、母からの伝承の味。ふるさと九州の味覚満載である。これまでも、母は私に、何となくさんの贈り物を残してくれたのだらうと思う。現在も、私にとって、母の笑顔がなによりの贈り物となっている。



## ◆団遊◆

立命館アジア太平洋大学非常勤教師（キャリア教育）、アソブロック株式会社、有現会社 ea 代表、「家族と子どもを想う出版社」ホンブロック発行人。“環境に変化と刺激を起こすものづくり”をモットーに、地域活性化から企業ブランディングまで幅広くプロデュース活動をしている。東京を会場に「団士郎家族理解ワークショップ」を隔月主宰（偶数月第二土曜日）。ぜひぜひ来てね。

<http://danasobu.com>

セキユリヲというデザイナーたちとともに手がける「salvia」というブランドが年末以来、いつも以上にメディアに取り上げられ、

その影響か、先日台湾国際ブックフェアに招待されて行ってきました。salviaでは靴下や手ぬぐい、文房具、雨具などの生活雑貨を作っています。次は6月末にパリで開催されるJAPAN FESTAからの招待がありそうです。

3月1日から私にインターン生が二人、一か月の約束でついています。下手に事務作業をやらせて「社会人気分」を味わって満足させても…と思い、自らテーマを決めて1か月、その研究に取り組むということをやらせています。卒業論文みたいなものですが、こちらは、そのテーマが受け入れ先の会社にとってもメリットがなければなりません。そのためには企業研究が必要で、ビジネスの理解が不可欠です。今はテーマ検討段階ということで、数日の就業体験を経て「自分がここで取り組みたいテーマ」を私にプレゼンしている状況です。主体的に動かないと何の情報も得られない環境の中で、いかに実のあるインターンシップに仕上げていくか。この試みにフィットする人は、きっとベンチャー気質といわれる人だろうと思っています。

とある豆腐屋さんから新商品のプロデュースを頼まれて取り組んでいます。高級豆腐メーカーとして知られるクライアントが求めているのは、新たな顧客接点。商品は高級スーパーや駅直結型の店舗で売れる小さ目サイズのお豆腐です。そこで、チームメンバーと検討を重ね、今までリーチできなかった30~40代男性にターゲットを絞ることを決め、ビールのお供に美味しいお豆腐を味わってほしいという気持ちを込めて「ピア奴」と名付けましたが、あえなく却下されました。この名が日の目を見ることはなくなりましたが、とても気に入った名前だったので、ここで小さくお披露目します。

## ◆鶴谷圭一◆

1960年12月11日生 50歳 射手座 血液B型 私の父は九州の宮崎県で教会の牧師兼、付属幼稚園園長をしており、幼稚園は保育者である母が実質運営しておりました。そんなこともあり、実家で園の手伝いをしておりました。実家を継ぐものと思いきや上京し、東京で縁もゆかりもない幼稚園に5年勤務し、そこで出会った妻と結婚。ただし、結

婚直前に日名子太郎先生という恩師について香港の日本語幼稚園に2年間勤務。その後帰国し、妻の実家である原町幼稚園に勤務したのが30歳。合計4つの幼稚園に勤務し、もうすぐ園長9年目になります。ちなみに妻は隣接する原町保育園の副園長、母が園長をやっています。私立幼稚園は、建学の理念に基づいて教育を行う、というのが建前ですが、それは、園長が好き勝手出来るということなのです。私は幼稚園の仕事が趣味のようなもので、園の活動は楽しさをベースに行わなければならない！というポリシーの持ち主です。基本楽道家です。

近況です。趣味のスノーボードで跳んでしまい年末に肋骨を骨折してしまいました。でも肋骨って手足ほどダメージはなく、痛いのを我慢して翌日も滑りました。咳をするのもめちゃ痛い日々が2週間ほど続きましたが、約1ヶ月でほぼ完治！再び週末は滑りに出かけています！



## ◆サトウタツヤ◆

2011年の1月末にイタリア・レッツェに行ってきました。長靴のカカトの部分。良く言えばヒルトリカルな街、悪く言えば田舎、でした。

話はかわり、最近、学生さんの就活のエントリーシートを見させてもらったのだが、まあびっくり。たとえば、志望理由を書く欄が400字しかないのに

私はいくつかの企業の説明会に参加させていただきました。その中でも御社の説明会で得たことがとても印象に残っており、是非御社で働かせていただきたいと感じました。このように思った具体的な理由は、御社

の経営理念である、「\*\*\*\*\*」という理念が私の考えと一致しているからです。

などと冒頭部分だけで170字も使ってしまう例があったのである。これじゃダメでしょ。以上のようなことは誰でも書けることだし、理念そのものは「御社」なる相手こそよく知っているんだし、とダメ出しした。

さらに話は変わるが、かくいう私も、英語論文を書いているときは似たようなものだなあと思い直した。2011年の2月末にはアメリカ・ウースターのクラーク大学に滞在したのだが、その時、クラーク大学のJaan Valsiner教授が、私の書いた原稿を読んでコメントしてくれるのである。いま、それらのコメントを見返してみると、以下のような感じだ。

DO NOT START A SENTENCE WITH "And"... IT IS OK IN COLLOQUIAL ENGLISH BUT NOT IN TEXT.

おやおや、COLLOQUIALって何よ、と辞書を引くと、口語。Andは口語で使うモノ、という指摘でした。さらに

In figure in now METACODE is labeled METADODE!

などというものもある。CODEと書くべところがDODEとなってしまっていたのだ。一方でヤーンは、良い展開になるとVery good!と返してくれる。それをみてまたやる気がでるわけだ。それを何度も繰り返して英語論文ができあがる。とすると、学生のエントリーシートの添削もダメだしだけではだめなわけだ。良くなったところは「良くなった!」と指摘することこそが重要だ。さっそく、良くなった部分を探して返し、さらなる飛躍を期待することにしよう。

## ◆坊 隆史◆他己紹介 松本健輔より

坊さんは、産業領域で活躍されているの臨床心理士です。学部先輩でもあり、大学院の先輩でもあり、心理士の先輩でもある大先輩です。グループでの参加者への伝わりやすいフィードバックを聞いて毎回勉強させて頂いております。このリレー連載を通してさらに勉強させてもらえたらと思います。それから、最近休みの日は昼間から飲んでいると

いうお話を聞きました。飲みすぎには注意してくださいね。

近況

様々な男性の対人援助に関わらせてもらっていますが、企業内のメンタルヘルスケアをメインの仕事としています。そのため全国の支社支店に出張をしています。落ち着きのない私にとって全国出張は楽しみのひとつでもあります。楽しみながら仕事ができるなんて幸せ者です。ところが出張中に本欄の執筆依頼があり、編集長の団先生に連絡がとれない事態になりました。どうやら私のこの文章が4号マガジンの最終原稿らしいです。新入りなのにこのルーズさ。この場をお借りしてお詫び申し上げます。こんな私の連載なので一寸先は闇が予想されますが、どうぞよろしくお願いいたします。(ぼうたかし)

- ★ 今回、この欄の充実が私にとっての課題でした。前号で、使い回しのプロフィールや、第二号と同じという方を登場させてしまったのです。だから今回から、もう一本の連載のつもりで、執筆者@短信の欄も独立して楽しんでいただけるものにする所存です。
- ★ 本文は、それぞれの分野のたっぴりの書き込みです。どうぞ、関心のあるところをダウンロードしたり、読書会のテキスト等にも、ご利用下さい。
- ★ 私は雑誌を買うと、編集後記を先に読みます。編集長日録とか、編集子からなんてタイトルが大好きです。一冊丸ごと編集日記でも構わないくらいです。
- ★ それにしても6頁は多すぎでしょう!そう思います。だから文字は小さめで、遠慮してるでしょ。通常フォント・サイズだったら10ページ超えてまっせ、って、何それ、開き直り、逆ギレ?それに、執筆者短信の編集記って、ああ、スペースが余っただけのこと...なるほど。

(編集長)